音楽指導者のリーダーシップ獲得のための課題

―学生指揮者に対するインタビュー調査をもとに―

音楽を教える教師にとってリーダーシップはとても重要です。なぜなら、合奏・合唱指導が授業の核をなす音楽科は、教師の態度、生徒への対応等、教師のリーダーシップが授業の良し悪しに大きく影響してくるからです。しかも合唱・合奏のように全体で一つの音楽をつくる場合、教師は一人ひとりの演奏や音の響きを一つにまとめていかなければなりません。特に合奏・合唱指導においては生徒の演奏の中から課題を発見して、適切な練習方法を提示し、問題を解決するのに教師の役割は重要となってきます。しかし多くの教師は演奏指導のためのリーダーシップの能力が育たないまま現場に出て、経験と勘に頼っている部分が多いのではないでしょうか。

よって本研究では、初期の合奏指導者にとって、リーダーシップを獲得していく上で何が課題となるのかをインタビューや合奏の参与観察などを通して明らかにすることを目的としています。

調査方法として、まずインタビューの調査対象者は、大学のサークル活動、吹奏楽部で2007年 1 月より合奏指導を始めた大学 2 年生、Ａさん。吹奏楽指導者としての経験は今回が初めてとなります。

手続きとして、まずＡさんが指導する合奏の参与観察を行ないました。そして合奏後に 1 対 1 のインタビューを行ないました。時期として、インタビューは2007年 6 月 3 日に行なわれた演奏会前に 3 回と演奏会後に 1 回、2007年12月23日に行なわれた演奏会前に 7 回実施しました。インタビューの時間は10分から30分の間で行ないました。

インタビュー調査と合奏の参与観察を分析する中で、Ａさんが課題として意識している内容を大きく次の５つに分類することができました。

１．合奏中の言語的な指示・指導について
２．スコアを分析するスキルと楽器の知識について
３．テンポ変化を示す指揮の技術について
４．理想の演奏イメージについて
５．リーダーとしての発話スキルについて

まず、合奏中の言語的な指示・指導についてＡさんはインタビュー当初から楽団の演奏に対しての言葉による指示に大変悩んでいました。Ａさんは合奏が進むにつれ、オノマトペや範唱による指導を多く取り入れるようになりました。ただ、それ以外の方法、例えばメタファーの利用や理論的説明についてはあまり変化がありませんでした。Ａさんはインタビュー中よく「言葉が出てこない」と話していました。合奏中、演奏者に対する指示内容の大半がオノマトペや範唱になってしまっていることに関して不満だったのではないかと考えます。このことから音楽的イメージを言葉で表現するためには語彙の獲得が必要だと考えます。

次に、スコアを分析するスキルと楽器の知識について特にＡさんは、合奏をよりスムースに進めるために楽器の特徴を把握しておかないと、演奏者への具体的な指示を出せないと感じているようでした。Ａさんは自分が普段演奏しておりよく知っている楽器以外の楽器群への指示に困っているようでした。

次に指揮の技術について、Ａさんは特にテンポ変化をさせるときの指揮を悩んでいるようでした。音楽の自然な流れの中でのリタルダンドなど、曲のテンポを変えるときの指揮は初心者にはとても困難です。Ａさんは演奏者とタイミングを合わせることが難しいと話していました。

理想の演奏イメージについて合奏中、指揮者が問題を発見する場面において、演奏者に明らかな間違いのほかに曲の流れなど全体を捉えたときに出てくる表現の指示などを伝えていく場面もあります。音の間違いは比較的すぐに発見できて指摘も容易です。しかし曲のイメージをしっかりと把握して演奏者に伝えることは難しいことです。Ａさんは自分自身で一曲通しての目標イメージがはっきりとしないために、イメージが明確にある部分と、そうでない部分を合奏するのに指示の具体性の差があったと話していました。

リーダーとしての発話スキルについてＡさんは指示した言葉が演奏者にきちんと伝わったか、演奏者から自分は信頼されているのかという大きな不安について口にしていました。特に自分が話しているときに、自分の話す内容についての自信のなさから話している途中に不自然な間が空いてしまうことを気にしていました。この原因として、リーダーとして説得力のある指示を出すための十分なスキルを獲得できていないことが考えられます。

今回のインタビューと参与観察を通して明らかとなった結果を基に、初期の合奏指導者としてのリーダーシップ獲得のための課題を整理します。

１．音楽的知識やスキルの学習

合奏指導者がやらなければならない音楽的知識の習得の一つとして複数の楽器を扱う吹奏楽の場合、各楽器の特性、例えば音域、音の出し方など全ての楽器についての知識も必要となってきます。楽器のことを知らないと合奏のときに演奏の間違いの原因を探れなかったり、的確な指示を出せなかったりするからです。ですから合奏指導者は、出来るだけ色々な楽器の演奏経験を持つ必要があります。せめて、各楽器の運指や音域などを知っておくこと、また普段から演奏者と対話をすることで、楽器の持つ特有の困難さや奏法による音色の違いなどについて理解しておく必要があります。

また、指導法に関して、今回のインタビューの中で浮かび上がってきたことは、特にテンポを変化させるときの指揮の問題でした。演奏がテンポに乗って流れているときの指揮は、それほど難しくはありません。しかしテンポを変化させる場面では、指揮者の曖昧なサインやためらいが演奏の乱れに直結することがあります。このことは実際に自分の指揮に対する演奏者の反応を体験して初めて気付く問題です。養成や研修の段階で、初任者は演奏者の前で指揮をする経験をできるだけ多く積むべきであろうと考えます。

２．音楽的語彙の獲得

ウッディは音楽的な指導を大きく次の３つに分類しています。インタビューと合奏の参与観察の結果、Ａさんの場合、オノマトペによる指導にかたよる傾向にあるということが明らかになりました。確かに、オノマトペや範唱による指導は、指揮者自身のイメージを直感的に表現することができるので、初任者でもあまり問題なく指導ができます。そして指導した後の演奏にもそれなりの効果は見られます。しかしオノマトペ、範唱、またはモデリングでは、演奏者は指揮者が示した通りに演奏するだけで、それ以上の主体的な表現変化は望めない傾向にあるということが先行研究から分かっています。演奏者の主体的な表現を引き出すためには、オノマトペや範唱だけではなく、メタファーや理論的説明などの様々な指導方法を場面によって使い分ける必要があります。それぞれの指導方法の長所と短所について学ぶ機会が必要です。

３．コミュニケーションスキルの獲得

指揮者は自分の指示したことを演奏者が理解したのかをその反応を見ながら合奏を進めていきます。特に初任者の場合、間違ったことは言ってないかについてとても不安になり、そのため話し方が不自然になってしまうことが明らかになりました。

この問題を解決するために、指導者はリーダーとしての発話スキルを多く学んでいかなければいけません。特に今回の結果から自分が伝えたいことを演奏者に分かりやすく自信を持って伝える技術を獲得する必要があります。例えば自分と相手の権利を尊重しつつ、自分の考えていること、感じていることを相手に素直に効果的に表現することをアサーションと言います。これはトレーニングによって獲得できるものです。

今回の研究は対象者一人に対して調査をしたものですので、この結果がどのくらい初任者に一般化できるかどうかについては今回の調査だけでは判断できません。よって、さらにこれから調査を進めていく必要があります。

以上で発表を終わります。